

I. ようこそ

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。今日、皆さんとここにいることができて嬉しい。

1. 初めでお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。

B. 子供たちを解散させる前に、ほんの数分間、マロー一家のために祈りたい。ジョシュとアビーは過去5年間、ここ岩国で教会の重要な一員として活動してきたが、今日は彼らがアメリカへ帰国する前の、私たちと共に過ごす最後の日曜日となる。

1. マロー一家は実は再訪の家族だ。今回の5年間の滞在の前に、2年間私たちと共に過ごしており、季節の移り変わりの中で、神様が彼らの家族と信仰を成長させてくださったのを見ることができたのは、大きな祝福だった。
2. 一家はフロリダ州ペンサコーラに戻る予定だ。ジョシュはそこで軍人としてのキャリアを終え、その後は主が彼らに何を用意されているかを見極めるつもりだ。それは間違いなく冒険であり、祝福となるだろう。
3. もし、彼らの周りにいる方々や、私たちのリーダーシップのメンバー、そして導きを感じ方々が、この兄弟姉妹に手を置いてくださるなら、それは祝福となるだろう。祈ろう。

C. 皆さんが席に戻る間に、小学生の子供たちも日曜学校へ送り出そう。

1. (第二礼拝：聖書英語クラスも同様)

D. 今朝は、ヨハネの福音書の節ごとの学びを、先週の続きから進めていく。

1. ですから、今朝聖書をお持ちの方は、ヨハネの福音書第5章を開いてほしい。
2. 聖書をお借りになりたい方は、遠慮なく周囲の椅子の下に置かれている聖書を手にとってください。今朝、皆で聖書を読み進めていく中で、ご自身で御言葉を読めることは重要だと考えている。

E. 先週、私たちは第5章の学びを始め、ユダヤ人の年次祭りの一つが行われていた時期に、エルサレムの城壁の外にあるベテスダの池で起こった癒やしの出来事について見た。

1. イエスは、38年間も病に苦しんでいた一人の男に近づき、「治りたいか」と尋ねた。
2. 最初、その男は癒やされることができないという言い訳ばかりしていたが、するとイエスは彼にこう言われた。「起き上がり、床を担いで歩きなさい」。
3. そして、その男が即座に癒され、イエスの命じた通りに寝床を担いで歩いた様子が記されている。
4. 人生の過去40年近くを病身として過ごしてきたこの男に癒しが訪れたのだから、誰もが大喜びし、大興奮するだろうと思うだろうが、実際はそうではなかった。

5. この癒やしの問題は、それが安息日に起こったことであり、その男は安息日に寝台を運んだとして、宗教指導者たちに摘発されてしまったのだ。

6. しかし、これらはすべてイエスの計画の一部だった。イエスは宗教指導者たちの注意を引きつけたかったのだ。彼らとその偽善に立ち向かいたかったのだ。彼らに対して自らの主張を述べる機会を求めていたが、ユダヤの祭りの最中、安息日に、大勢の人々が集まる中で起こったこの癒やしは、まさにその絶好の機会だった。

F. 今朝の聖書箇所は、ヨハネによる福音書第5章16節から30節だ。そして、メッセージのタイトルは「大胆な主張」とする。

1. これから見ていくように、イエスは宗教指導者たちとの対決の中で、非常に大胆な主張を繰り広げる。その主張は、宗教指導者たちに、イエスのその大胆不敵さと度胸に驚嘆させることになるだろう。そして最終的には、イエスを彼らの間で「公敵ナンバーワン」にしてしまうのだ。
2. 皆さんも、もうヨハネによる福音書第5章を開いていることだろう。ここで、神と御言葉に敬意を表して、立ち上がることができる方は全員、立ち上がっていただきたい。
3. 私の聖書から本文を読み上げる。私はNKJV版で読むので、もし別の訳本を読んでいるなら、私が読むのに合わせて、自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。
4. 本文は16節から始まる。安息日に病人を癒し、寝台を担いで行くよう命じたのがイエスであると知った後、宗教指導者たちがイエスを軽蔑する様子が描かれている。16節にはこうある... (R & P)

II. はじめに

A. 今朝の聖書箇所は、実際にはイエスと宗教指導者たちとの対立の、ほんの一部に過ぎない。

1. この最初の部分で、イエスはご自身について、また父なる神との関係について、数々の大胆な主張をされている。
2. 来週は、主の御心があれば、この宗教指導者たちとの対立の第二部を取り上げ、イエスが様々な証言や証人によってご自身の主張を裏付ける様子を見ていく。

B. メモを取るのを好む方のために、今日の聖書箇所ではイエスが直接的または間接的に述べている11の異なる主張を書き出していく。

C. まず、16～18節を読み返して、イエスの大胆な主張を見ていこう。

III. ヨハネ5:16-18. 「わたしは父と等しい。」

A. 16節は「それゆえに」で始まっているため、ヨハネが具体的に何を指しているのか、少し遡って確認する必要がある。

1. 10～15節には、イエスによって癒やされ、命じられた通りに床を担いで歩いた男に対する告発と尋問の詳細が記されている。
 - a. 宗教指導者たちは、彼が律法を破ったと非難した。すなわち、安息日に仕事をしたことで、神の安息日を破ったと。

- b. 安息日は休息の日であるはずだったが、この男は寝床を運んでいた。彼らの解釈と伝統によれば、それは「仕事」とみなされ、したがって安息日の違反であり、安息日には仕事をしないという戒めへの違反であった。
- c. 公共の場で何かを運ぶこと、それがどれほど小さく、軽く、取るに足らないものであっても、すべて「仕事」とみなされた。安息日にポケットに針を携帯することさえ「仕事」と見なされたのだ。したがって、寝床を運ぶことなど、到底許されるはずがなかった。
- d. 問い詰められた時、その男は基本的にこう答えた。「私を癒やした方が、『起き上がり、床を担いで歩きなさい』と言われたので、私はそうしたのだ。彼は私を癒やしてくれたのだから、当然、言われた通りにしたのだ。」
- e. 宗教指導者たちは、この男が奇跡的に癒やされたという事実には全く関心を示さなかった。彼らが知りたがったのは、安息日にこの男に寝床を運べと命じたのが誰かということだけだった。
- f. しかし、その男はそれが誰なのか知らなかったので、彼らに教えることはできなかった。
- g. その後、イエスは神殿の中でその男のところへ行き、自分が誰であることを告げられた。それを受けて、その男は宗教指導者たちのところへ行き、自分を癒したのはイエスであると告げたのだ。
2. そして、今朝の聖書の箇所が述べているように、ユダヤ人たちがイエスを迫害し、殺そうとしたのは、まさにこの理由によるものだ。すなわち、イエスが安息日に一人の男を癒したからである。
- B. ここにある偽善は見逃せない。宗教指導者たちは、イエスが安息日に人を癒し、寝床を担ぐように命じたことに腹を立て、その報復としてイエスを殺す方法を画策し始めたのだ。
1. 十戒の第四は、「安息日を覚えて、聖なる日として守れ」というものだ。（**出エジプト記 20:8**）
2. しかし、第六の戒めは「殺してはならない」である。（**出エジプト記20:13**）
3. 彼らは、イエスが自分たちの解釈による第四の戒めに違反したことを大げさに問題視していたが、第六の戒めの明確な理解に背くことには何の抵抗も感じていないようだった。
- C. しかし、イエスは宗教指導者たちに答えた。イエスはこの偽善に言及する好機を捉え、彼らに知っておくべきいくつかのことを明らかにしようとしていたのだ。
- D. 安息日に癒やしを行ったことに対する彼らの軽蔑に対し、イエスはこう答えた。「わたしの父は今までも働いておられる。わたしも働いているのだ。」
1. 確かに、第七日目に父なる神は創造の業を休まれたが、それは神がご自身の被造物を顧み、維持することをやめたという意味ではない。
2. 父なる神は第七日に創造の業を止めたかもしれないが、それは神がご自身の被造物を維持し、守り続ける最初の日であったのだ。

3. 神は休みをとらない。神に休日などない。創造の中で働いていない日などないのだ。休暇に出かける日もなければ、病欠を申し出る日も、出勤しない日もない。神は常に、創造物の中で、そして創造物を通して働いているのだ。
- a. 詩篇121篇は、イスラエルを守られる主について、「主はまどろむこともなく、眠ることもない」と宣言している。（**詩篇121:4**）
- b. いわば、神は常に勤務中である。神は常に、ご自身の被造物の中で、そしてその全き中で働いておられる。私たちは週のどの日でも、昼夜を問わず神に呼びかけることができ、神はそこにいて私たちの祈りを聞き、ご自身の計画を遂行し続けてくださる。
- c. 神は「ごめん、今日は安息日だから休みの日なんだ。今日は仕事しないから、また別の日に祈ってくれ」などとは決して言わない。
4. イエスは単に、御父がなさっていることを行っていたのだ。御父はその時まで働いておられたのだから、イエスも働いていた。それが安息日であることは問題ではなかった。神の被造物の中や被造物を通しての御業は、安息日だからといって止まることはない。それは続くのだ。
5. そして、私たちはそのことに深く感謝すべきだ。もし神が毎週一日休みを取り、祈りに答えないと決め、私たちの中で、そして私たちを通して御業を続けず、御手のひらで宇宙を支え続けることをやめたら、この世界がどうなるか想像できるだろうか。
6. 私たちが知っているこの世界は、存在しなくなるだろう。神は私たちのために、常にすべてを支え続けているのだ。もし神がたった一日でも手を休めたなら、私たちの世界は崩壊してしまうだろう。
7. そこで、誰かを癒すことで安息日を破ったという彼らの非難に対し、イエスはただこう言った。「わたしの父は働いている。だから、わたしも働くのだ。」
- E. ここで、神を「父」と呼ぶことで、イエスは間接的な主張をしておられた。それは、周囲のすべての人々、イエスの声が届く範囲にいるすべての人にとって、明白であり、理解できるものであった。
1. イエスは、神が御父であると主張し、それによって、御自身が神の子であり、本質において神と等しい存在であると主張していたのだ。イエスは、御父と同等の神性を持ち合わせていると主張していたのである。
2. イエスが用いた言葉に基づけば、それは極めて明白で明らかだった。宗教指導者たちは、イエスが何を言っているかを正確に理解していた。なぜなら、18節でそう記されているからだ。彼らは、イエスが安息日を破っただけでなく、「神は私の父である」と言うことで、自らを神と同等であると主張したため、なおさらイエスを殺そうとしたのである。
3. 歴史を通じて、イエスが決して神であると主張しなかった、あるいは聖書がそのようなことを教えていないと主張しようとする人々は、この聖書箇所やそれに類する箇所を一度も読んだことがないに違いない。
- a. ヨハネ10章30節のような箇所だ。そこではイエスが「わたしと父とは一つである」と語っている。ユダヤ人たちは再び石を拾い上げ、イエスを石打ちにしようとした。（**ヨハネ10:30-31**）
- b. イエスが、なぜ自分を石打ちにしようとしているのかと尋ねると、宗教指導者たちはこう答えた。「我々は、あなたが善い行いをしたから石打ちにするのではない。」

冒流のゆえに、また、あなたが人でありながら、自分を神としているからだ。」（ヨハネ 10:33）

C. パウロのフィリピの信徒への手紙のような他の聖書箇所では、イエスについて「神の御姿でありながら、神と等しい者であることを強奪とは考えなかった」（フィリピ2:6）と記されている。

d. ユダヤ人たちがイエスをポンティオ・ピラトの前に引き出した時、彼らがイエスに対して提起した告発はこれであった。彼らは、イエスが自らを神の子としたゆえに、死に値すると主張したのだ。（ヨハネ19:7）

4. 主や主の御業に対して著しく盲目であった宗教指導者たちは、目はあるが見ることができなかった者たちだったが、イエスがここで父と等しい神性を有すると主張していることについては、容易に見て理解できた。そして彼らは、そのためにイエスを殺そうとしたのだ。

F. 本文を読み進め、イエスが他にどのような大胆な主張をされるか見ていこう。次の19節を読んでほしい。

IV. ヨハネ5:19。「わたしは父と同じ働きをしている。」

A. 「まことに、まことに」という表現は、原語では実際には「アーメン、アーメン」であり、KJV（欽定訳）では「まことに、まことに」、その他の現代訳では「本当に、本当に」と訳されている。

1. イエスがこの言葉を使ったのは、これから語ろうとしていることに注意を向けさせるためだった。まるで「おい、よく聞け。今から本当に重要なことを言うぞ...」と言っているかのようだった。

2. この箇所でイエスはこの言葉をさらに二度使う。ここで語っていることが本当に重要であり、人々は注意を払い、イエスの言葉を正確に理解する必要があることを知らせるためだ。

B. 「まことに、まことに、あなたがたに言う。子は、父がなさることを見ない限り、自分からは何事もできない。父がなさることを、子も同様にするのだ。」

1. イエスはご自身から何事もなさらなかった。ご自身の意志や意思によって何かをなさったわけではない。イエスがなさったことはすべて、単に父がなさることを見習って行われたに過ぎない。

2. ここでイエスは、ご自身がなされたことはすべて、父がなされたことだけだったと主張している。つまり、イエスの行いは、単に父がなすのを見て、それを反映したものに過ぎなかったのだ。

3. イエスがなされたことは、父がなさるのと同じようになされた。「同じようになされた」という表現は、同等の程度や様式を指し、完全な一致を意味する。

4. イエスは、御自身がお父様と本質においてのみならず、御業においても等しいと主張しているのだ。御自身の御業は、まさに神の御業と同等であると主張している。御自身の御業、御行動は、お父様の御行動と同等であるということだ。それらは同等の程度であり、お父様の御行動と完全に一致しているのだ。

5. 宗教指導者たちの面前で、しかも安息日、神殿という場所で、ユダヤの祭りの最中に、これほど大胆な発言をするとは、彼は、自分の言葉が父そのものと同じ程度のものであると、皆に聞こえるように主張していたのだ。

程度であると、すべての人が聞くように主張していたのだ。父をこれほどまでに崇め奉っているように見える人々の前で、これほど大胆で勇氣あることを言うとは。

C. しかし、イエスはまだ始まったばかりだった。次の節、20節で彼が何と言っているか見てみよう。

V. ヨハネ5:20。「わたしは父に愛されており、父から何をすべきかを示されている。」

A. イエスは、ご自身の業が父の業と同等であると主張しただけでなく、ここではその理由を明らかにしている。

1. それは、父がイエスを愛し、イエスに、父自身が成し遂げたいと願うすべてのことを示しているという事実に関係している。

2. イエスは、御父と親密な関係にあると主張している。それは、御父がイエスを愛し、御父自身が喜んで行うすべてのことをイエスに示そうと望んでいるからだ。

3. そして、イエスはすでに、ご自身から何事もなさらないと語っている。これは、イエスのなされるすべてのことが、神の愛に根ざしていることを示している。それは、イエスが父と親密で密接な関係にあるという事実に根ざしているのだ。イエスがなぜ特定のことをなさるのかという問いに対するあらゆる答えの核心には、父がイエスを愛しておられるという事実がある。

4. 父がイエスを愛しているからこそ、父はイエスに、彼に成し遂げてほしいことを示すのだ。

B. そしてイエスは、父がイエスに、これらよりもさらに大きな業を示そうとしてと語っている。それは、宗教指導者たち、すなわちユダヤ人たちが、イエスの業に驚嘆するようにするためである。

1. この「驚嘆する」という言葉は、感嘆や驚きに打たれることを意味する。

2. 要するに、イエスが言っているのは、もし彼らが安息日の癒しに圧倒されたのなら、覚悟したほうがいい、ということだ。なぜなら、神はそれよりもはるかに大きな業をイエスに示そうとしているからだ。これは、神がイエスのために計画された業のほんの始まりに過ぎない。

C. 本文を次節、21節へと進めよう。

VI. ヨハネによる福音書5章21節。「わたしは、人を死からよみがえらせることができる。」

A. イエスが成し遂げる神の偉大な業の一例として、イエスは死者を生き返らせる父の力について語っている。

1. さて、トーラーには、命を与え、命を奪うこと、すなわち殺し、再び生かす力を持つのは神のみであると教えられている。

2. 申命記32章39節にはこう記されている。「見よ、わたしこそ、わたしこそが神である。わたしのほかに神はない。わたしは殺し、また生かす。傷つけ、また癒やす。わたしの手から救い出す者はいない。」（申命記32:39）

3. 死者を蘇らせる力は、神のみが持つとされた三つの偉大な鍵の一つであった。

a. 天を開き、雨を降らせる鍵

b. 胎を開き、受胎をもたらす鍵

c. そして、墓を開き、死者をよみがえらせる鍵

B. 口伝によって伝えられてきた伝統を通じて、ユダヤ人たちは、これらの鍵を神だけが握っていると信じていた。したがって、イエスが死者をよみがえらせる力を持つと主張することは、ユダヤの指導者たちにとって冒涇とみなされることだった。それは神のみに許されたことだったのだ。

1. しかし、ヨハネの福音書を読み進めていくと、イエスがまさにそのことを行っているのがわかるだろう。
 - a. ヨハネ11章では、イエスがラザロを墓から呼び出し、埋葬されてから4日が経った死者を生き返らせる様子が記されている。
2. 他の福音書の記述でも、イエスが同様のことをなさったことが記されている。
 - a. ルカの福音書では、ナインの未亡人の息子が葬列で運ばれ、埋葬されるはずだった棺の中から、イエスが彼をよみがえらせたことが記されている。
 - b. 三つの共観福音書すべてに、地元の会堂の長であるヤイロと、亡くなったその娘についての記述がある。イエスはヤイロの家に来て、少女の死体が横たわっている部屋に入り、彼女に向かって「タビタ、クミ」と語った。これは「少女よ、あなたに言う。起きなさい」と訳される。すると、少女はすぐに起き上がり、歩き出した。彼女は12歳だった。その場にいた人々は皆、大きな驚きに打ちのめされた。（マルコ5:41-42）
3. イエスはこの箇所でこう言われている。「父が死者を生かし、命を与えるように、子もまた、御自分の望む者に命を与えるのだ。」
 - a. この「同じように」という言葉は、同じ方法という意味だ。父が死者をよみがえらせ、命を与えるのと同じように、子もまたそうするのだ。
 - b. イエスは、人を死からよみがえらせる力を持っていると主張している。それは、正統派のユダヤ人たちが神のみに属するものだと言っていたことだった。
4. ユダヤ人たちが、イエスが安息日に癒やしを行ったことに腹を立てていたことは知っている。しかし、イエスがこのような大胆な言葉を突きつけた時、彼らの顔色がどうだったのか、思わず想像してしまう。
 - a. 子供の頃、アニメを見ていて、あるキャラクターの耳から蒸気や煙が吹き出しているのを見たことを覚えているだろうか。バグズ・パニーに裏をかかれて激怒するヨセミテ・サムのようなものだ。あるいはトムとジェリーかもしれない。そのアニメを知っている人はいるか？ 私が何を言っているか分かるだろうか？
 - b. まさに今、イエスの言葉を聞いている宗教指導者たちの間で、そんな光景が繰り返されていると私は想像する。彼らの目はぐるぐる回り、耳からは蒸気が噴き出している。イエスの言葉にあまりにも呆気にとられて、そうなるほどだ。

C. しかし、イエスの話はまだ終わっていない。22節を見てほしい。

VII. ヨハネによる福音書5章22節。「わたしには、すべての裁きが委ねられている。」

A. これもまた、神のみに許されたことだと教えられてきたことだ。

1. 詩篇9篇にはこう記されている。「しかし、主は永遠に存続される。主は裁きの座を設けられた。主は正義をもって世界を裁き、公正をもって諸国民を裁かれる。」（詩篇9:7-8）

2. 詩篇50篇はこう宣言している。「天は神の義を告げよ。神ご自身が裁き主だからである。」（詩篇50:6）
3. 詩篇96篇は、神の来るべき裁きについての歌である。そこにはこう記されている。「主は来られる。主は地を裁くために来られる。主は正義をもって世界を裁き、真実をもって諸国民を裁かれる。」（詩篇96:13）
4. 伝道の書12章14節にはこう記されている。「神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠されたことまで含め、すべての行いを裁きに付されるからだ。」（伝道の書12:14）

B. 旧約聖書は繰り返し、神を地の裁き主として語っている。義をもって世界を裁く神。あらゆる行いを裁きに付す方としての神。

1. したがって、イエスが「すべての裁きは子に委ねられており、父はだれをも裁かない」と語るとき、それは、神を裁き主として言及している旧約聖書のすべての引用が、実際には父なる神ではなく、子なる神を指していることを意味する。
2. イエスは、すべての裁きが御自身に属すると主張しているのだ。イエスこそが、義をもって世界を裁く方となる。イエスこそが、私たちの行いのすべてを裁きに付す方となるのだ。
3. パウロはテモテへの第二の手紙の中でこの真理を繰り返し述べ、イエスを、御自身の現れと御国において、生ける者と死んだ者とを裁く方として描いている。（テモテへの手紙第二4:1）
4. 使徒行伝において、ペテロは、イエスが彼と他の弟子たちに、人々に宣教し、「神によって生ける者と死んだ者の裁き人として定められたのは、この方（イエス）である」と証しするよう命じたと語っている。（使徒10:42）

C. イエスはこの世の裁き主となる。ここで驚くべきことは、イエスが全地の、生ける者と死んだ者の両方の裁き主として定められているにもかかわらず、イエスの心は、誰をも裁かずに済むことを望んでいるということだ。

1. 神は御子をこの世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子を通して世が裁きから、滅びから救われるためである。イエスは私たちが救われ、裁きを免れることを望んでおられる。（ヨハネ3:17）
2. 十字架を通して、イエスは私たちが御自身の裁きから逃れる道を備えてくださった。しかし、誰もがその道に耳を傾けるわけではない。誰もが、イエスが備えてくださったその道を歩むわけではない。「光が世にきたのに、人々は光よりも闇を愛した。それは、彼らの行いが悪かったからである。」（ヨハネ3:19）
3. 一部の人々はむしろ闇の中に留まりたいと望むため、主はそうすることを許し、彼らの行いに応じて裁かれる。そして彼らは不十分であると見なされ、イエスが定めた完全な基準に達しない。彼らは文字通り、イエスの十字架にかけられた御体のために地獄へ落ちるのだ。
4. イエスは人々を御自身の裁きから救うために来られたが、それは、イエスが全地の裁き主としての責任を果たさないという意味ではない。

D. 本文を読み進めよう。23節を見て、イエスによるもう一つの大胆な宣言を確認しよう。

VIII. ヨハネ5:23。「父が栄光を受けるように、わたしも栄光を受けるべきである。」

たちは死から命へと移るのだ。

A. 神は、すべての人が御子を敬うようにと、すべての裁きを御子に委ねられた。すなわち、父を敬うのと同じように、御子を敬うようにと。

B. もしあなたが御子を敬わないなら、あなたは父を敬っていないことになる。このことは、宗教指導者たちの血を沸騰させるに違いない。彼らが父を敬っていないという考えや発想が。

1. 彼らの多くは、ごく些細な細部に至るまで、神を敬うことに人生を捧げてきた。庭で育てたハーブからさえ十分の一を献げていた。彼らは神を敬うために、これほどまでに細心の注意を払っていたのだ。
2. それなのに、イエスはこう言っている。もし自分（イエス）を敬わないなら、父を敬うことなどあり得ない、と。父を敬うとは、父が遣わした御子を敬うことなのだ。

C. ここでイエスが主張しているのは、御自身も父と同じように崇められ、敬われるべきだということだ。つまり、両者は等しく敬われるべきなのだ。

1. 「敬う」という言葉には、尊ばれ、高く評価されるという意味が含まれている。それは、何かや誰かに価格や価値を定めることを指すのだ。
2. イエスは、ご自身の価値が父の価値と同等であるべきだと主張している。つまり、両者は同じ価値を持ち、同じ敬意と尊敬を払われるべきだということだ。

D. 神を愛している、あるいは神を敬っていると言いながら、御子を信じない人々がいる。しかし、イエスがここで言っているのは、それはあり得ないということだ。

1. 神を愛している、あるいは神を信じていると言いながら、イエスを愛したり信じたりしないということはあり得ない。神を愛し、神を敬うということは、すなわちイエスを愛し、イエスを敬うことなのだ。
2. 両者を切り離すことはできない。一方を愛し、敬うなら、もう一方も愛し、敬うことになる。
3. これらの宗教指導者たちが実際にイエスを殺そうと画策しているという事実は、彼らが主ご自身からどれほどかけ離れているかを物語っている。

E. 話を続けよう。まだ5つの主張が残っている。24節と25節を一緒に見てみよう。

IX. ヨハネによる福音書5章24-25節。「わたしの言葉への信仰によって、わたしは永遠の命を与える。」

A. この箇所ではイエスは、再び「まことに」「まことに、まことに」「本当に、本当に」という同じ表現を用いている。そしてそれを二度繰り返していることから、ここで語られていることが極めて重要であることを示しているのだ。

1. まるでイエスがこう言っているかのようだ。「よく聞け、みんな。これを聞き逃すわけにはいかない。これは重要だ。これが君たちが本当に知るべきことだ。」

B. イエスは、御言葉を聞き、御自身を遣わされた父を信じる者は、永遠の命を持つと語っている。

1. 彼らは裁きを受けることはない。なぜなら、私たちの罪はすでにカルバリの十字架の上で裁かれたからだ。
2. そして、彼らは死から命へと移ったのだ。私たちがイエスに、その御言葉に、そして私たちを裁きから救い出すというこの偉大な救出の使命のためにイエスを遣わされた御父に信仰を置くとき、私

3. 今朝、あなたが信者であるなら、あなたは永遠の命を持っている。今この瞬間、主と共に永遠の中に生きて
いるわけではないかもしれないが、あなたは永遠の命を持っている。あなたの未来は定まっており、確かな
ものだ。あなたは死から移ったのだ。
 4. 死は、もはや私たちに何の力も及ぼすものではない。この地上で最後の息を引き取るその瞬間こそ、天国で
最初の息を吸う瞬間となるのだ。
 5. イエス・キリストへの信仰によって、死の刺は取り除かれる。死は恐れるべきものではない。私たちに何ら
の力も及ぼすものではない。死とは、一時的なものから永遠のものへと移り行く「卒業」である。信者にと
って、それは祝うべきことであり、喜び祝うべきことなのだ。
 6. しかし、イエスを信じない者にとって、死は恐れるべきものである。なぜなら、イエス・キリストを信じ
る唯一の機会、今この人生の中にあるからだ。一度死んでしまえば、キリストについて考えを改め、彼
に従う機会は二度とない。
 7. 死が訪れれば、あなたの運命は決まってしまう。そして、その時がいつ来るかは誰にも分からない。死はい
つの日か、いつの瞬間にも、あなたの扉を叩くかもしれない。最も予期せぬ時に訪れるかもしれない。今こ
の瞬間、高速道路を走っているかと思えば、次の瞬間には主の御前にいるかもしれないのだ。
 8. だからこそ、イエスへの信仰を先延ばしにしないことが極めて重要だ。先延ばしにし続けて、ある日、最
も予期しない時に人生が終わり、イエスに信仰をもって応答する機会も失われてしまうような事態は避け
たいはずだ。
 9. もし今日ここにいるあなたが、まだイエスを信じていないのなら、どうか先延ばしにするのをやめて、主
に身を委ね、イエスを信じなさい。イエスの御言葉と、あなたのためにイエスを遣わされた父なる神を信
じなさい。もしイエスの福音のメッセージを信じるなら、あなたは裁きを免れ、イエスと共に永遠の御国
での場所を確保することができるのだ。
- C. ここでイエスが述べていることは重要だ。それは大きな主張である。「まことに」、「まことに、まことに」、
「本当に、本当に」。イエスの主張とは、御言葉への信仰を通して永遠の命を与えるということだ。
1. 救いは恵みによるものであり、信仰を通して与えられる。行いによるものではない。そして、これは
当時の宗教指導者たちの考えとは真っ向から対立するものであった。彼らは、律法に従う者だけが天
国に入れると教え、信じていたのだ。
 2. イエスの主張は、救いは行いではなく信仰によるものだということだ。救いと永遠の命は、イエスへの信仰
、すなわちイエスの福音のメッセージへの信仰を通して与えられる。ヨハネ3章16節を信じることを通して
だ。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅
びることなく、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3:16）
- D. イエスは言われた。「死者が神の子の声を聞く時が来る。今がその時だ。それを聞く者は生きる。」
1. ここでイエスが語っているのは、霊的に死んでいる人々についてだ。それは、過ちと罪の中に死んでいる人
々についてである。それは、イエスが私たちを生かしてくださる前に、私たち全員が人生のどこかでいた場
所である。（エペソ2:4）

2. エベソ人への手紙2章は次のように続いている。「しかし、憐れみに富む神は、私たちを愛してくださったその大きな愛によって、私たちが罪過の中に死んでいたときでさえ、キリストと共に私たちを生かしてくださった。（あなたがたは恵みによって救われたのである）」（**エベソ2:4-5**）
3. 私たちは皆、かつて罪と過ちの中で死んでいた。しかし、神の恵みのメッセージに応答した時、神は私たちを生かしてくださった。私たちが神に希望と信仰を置いた時である。
- E. さて、本文を読み進めよう。イエスがご自身についてまたしても大胆な宣言をされている26節を、私と一緒に見てみよう。
- X. ヨハネ5:26。「わたしは自ら存在する者である。」
- A. 自らに命を持つということは、単に自分の中に命の息があるということではない。この言葉は、自存していることを意味する。つまり、あなたは何か他のものや誰から生まれた被造物ではないということだ。あなたの命は、他のいかなるものからも完全に独立しているということだ。
1. 私たちの中に、自ら存在する者は一人もいない。私たちは皆、両親から生まれたのだ。私たちは存在そのものを両親に依存していた。もしあなたの両親が出会わなければ、あなたは生まれていなかっただろう。
2. イエスが「父は御自身の中に命をお持ちである」と言うとき、その意味するところは、父は被造物ではなく、その存在において永遠であるということだ。父は常に存在し、今も存在し、そして永遠に存在し続ける。父の命は、何ものにも依存していない。
3. そして、御子も同様だ。**イエスは、自ら存在し、**本質において永遠であり、命においていかなるものや誰にも全く依存していないと**主張している**。その命は、御自身の神性という本質に根ざしている。御子は常に存在し、今も存在し、永遠に存在し続ける。
4. 御子なる神は、被造物ではない創造主である。彼は万物の源であり、すべてのものを創造し、存在するすべてのものを支えている方である。彼は、他のすべてのものがその源、存在、そして継続を見出す方である。彼は、すべての命を支える、常に遍在する方である。（Got Questions）
5. コロサイ人への手紙1章にはこう記されている。「なぜなら、天にあるもの、地にあるもの、目に見えるもの、目に見えないもの、王座であれ、支配であれ、権威であれ、権力であれ、すべてのものは、彼によって造られたからである。すべてのものは、彼によって、また彼のために造られた。彼はすべてのものの先におられ、すべてのものは彼にあって立っている。」（**コロサイ1:16-17**）
- B. この大胆な主張を聞けば、宗教指導者たちは彼を石打ちにするための石を探し回ることになるに違いない。
- C. 続けて...27節だ。
- XI. ヨハネ5:27；「わたしはメシアである」
- A. イエスは再び裁きの話題を持ち出す。これは、裁きが御自身に委ねられていることについて、すでに言及していたことだが、最後に少し付け加えた言葉は、非常に大胆な主張を間接的に示している。
1. イエスは、自分が「人の子」であるゆえに、裁く権威が自分に与えられていると語っている。「人の子」という称号は非常に特徴的だ。これは

ダニエル書第7章で初めて言及され、特にメシアを指すものである。

2. ダニエル書7章13～14節にはこう記されている。「私は夜の幻の中で見ていると、見よ、人の子のような方が、天の雲に乗って来られる。彼は古き日からの御方の御前に進み、彼を御前に引き寄せた。すると、彼に支配権と栄光と王国が与えられた。それは、すべての民、国、言語が彼に仕えるためである。彼の支配は永遠の支配であり、決して滅びることなく、彼の王国は決して滅ぼされることのないものである。」（**ダニエル書7:13-14**）
3. これは、メシアの到来に関する極めて重要な預言であった。ユダヤ人たちは、メシアが来て全地を支配し、権威を行使すると信じていた。すなわち、メシアは永遠の王国を築き、高き所から統治し、支配するのだと。
4. イエスが自らこの称号を名乗ることで、彼は目の前の宗教指導者たちに対し、**自分がメシアである**と大胆に宣言しているのだ。自分がダビデの家系から来る待望の王であり、神が永遠の王国を築くために用いるお方であると。そのお方
5. イエスは、自分こそが彼らが待ち望んでいたその方であると主張しているのだ。自分こそが、彼らの現在の希望、夢、そして願いに対する答えであると。イエスは彼らのメシアであり、油注がれた者、主の選ばれた方なのだ。
- B. 28節と29節を見てみよう。
- XII. ヨハネによる福音書5章28-29節。「わたしはすべての人をわたしの前に呼び集め、二つのグループに分けよう。」
- A. イエスは28節の冒頭で「これを不思議に思ふな」と述べている。イエスが語りかけていた宗教指導者たちは、この時点できっと呆然としていたに違いない。
- B. イエスは続いて、来るべき時について言及する。以前、25節で「その時は来る」と述べたが、今は「来ている」と語った。しかしここでは、その主張を未来、すなわち来るべき時に限定している。
1. イエスが語っているこの時は、死んで墓の中にいるすべての者が、イエスの声を聞いてよみがえる時である。彼らはイエスの御前に現れ、その後、二つのグループに分けられる。すなわち、「いのちへのよみがえり」と「さばきへのよみがえり」である。
2. 善を行った者は、いのちの復活へと現れる。悪を行った者は、さばきの復活へと現れる。
3. 二つの復活が言及されている。善を行った者のためのものと、悪を行った者のためのものだ。
- a. ここで、復活が善行に基づくものではないことを理解してほしい。そうだとすれば、救いは信仰によるものであるというイエスの明確な教えと矛盾してしまうからだ。
- b. 私たちは「信仰+行い」によって救われるのではなく、「実を結び信仰」によって救われるのだ。キリストへの真の信仰は、良い実、すなわち善行をもたらす。したがって、善を行った者とは、キリストに信仰を置き、その結果として悔い改めにふさわしい実を結んだ者たちを指す。彼らは、神が彼らのために備えてくださった善行の道を歩んできたのだ。

4. パウロはコリント人への第一の手紙15章で、イエスを復活の初穂として語り、最初の復活について述べている。彼はこう書いている。「しかし今や、キリストは死者の中からよみがえり、眠りについた人々の初穂となられた。なぜなら、死は人によって来たが、死者たちの復活もまた人によって来たからである。「アダムにおいてすべての人が死ぬのと同じように、キリストにおいてすべての人が生かされることになる。しかし、それぞれが自分の順序に従ってである。キリストが初穂であり、次に、キリストの来臨の時にキリストに属する者たちである。それから終わりが来る。すなわち、キリストが王国を父なる神に渡し、すべての支配、権威、力を滅ぼす時である。」（**1コリント15:20-24**）
5. つまり、この最初の復活は、時間をかけて起こる出来事である。そこには順序がある。まずイエス、次にキリストの来臨の時にキリストに属する者たちである。必ずしも、両方のカテゴリーが同時に起こる同時的な復活について語っているわけではない。
6. 『ヨハネの黙示録』20章6節にはこう記されている。「最初の復活に与る者は、幸いであり、聖なる者である。第二の死は、彼らには権威を持たない。彼らは神とキリストの祭司となり、キリストと共に千年間支配する。」（**黙示録20:6**）
7. しかし、黙示録20章を読み進めると、裁きのために復活する者たちについての記述が出てくる。これは、キリストの千年の統治の後、いわゆる「大いなる白い御座の裁き」の前に起こる。
- a. 黙示録20章にはこう記されている。「そこで、私は大きな白い御座と、その上に座しておられる方を見た。その御顔から、地と天とが逃げ去った。そして、それらのための場所は見当たらなかった。また、私は大小の死者が神の御前に立っているのを見た。そして、書物が開かれた。さらに別の書物、すなわちいのちの書が開かれた。そして、死者は、書物に記されていることに基づき、その行いによって裁かれた。海はその中にいた死者を吐き出し、死と黄泉もその中にいた死者を吐き出した。そして、彼らはそれぞれ自分の行いに応じて裁かれた。その後、死と黄泉は火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。また、いのちの書に名が見出されなかった者は、みな火の池に投げ込まれた。」（**黙示録20:11-15**）
- C. ここでイエスが主張しているのは、すべての人が御自分の御前でよみがえり、その後二つのグループに分けられるということだ。一つは、天において主と共に永遠を過ごす「いのちへのよみがえり」に加わる者たちであり、もう一つは、地獄において主から離れて永遠を過ごす「さばきへのよみがえり」に加わる者たちである。
1. 真実とは、すべての人がひざまずき、イエスが主であることを告白することだ。すべての人がイエスの御前でよみがえる。彼らはイエスがどのような方であるかを目の当たりにする。彼らはイエスを知り、その御前に立つことになる。
2. パウロはフィリピの信徒への手紙の中で、神がイエスを高く上げ、すべての名にまさる名を授けられたこと、すなわち、イエスの御名の前で、天にいる者も、地にいる者も、地の下にいる者も、すべてのひざがひざまずき、すべての舌が

イエス・キリストが主であることを告白するようになる、と書いている。」（**ピリピ2:9-11**）

3. つまり、誰もが最終的にはひざまずき、イエスを主と告白することになる。しかし、永遠の彼方ではなく、この世のうちにそうする者だけが、いのちへとよみがえるのだ。事後にひざまずき、イエスを主と告白する者たちは、裁きへとよみがえり、キリストから離れて地獄で永遠を過ごすことになる。
4. 神は誰に対しても、そのような結末を望んでおられない。だからこそ、神は御子を遣わされたのだ。私たちが裁かれることを免れる道を開くために。裁きのために復活する者たちは、キリストを拒んだ自らの行いによって、その運命をたどることになる。神が誰かを地獄に送るわけではない。私たちが、御子への信仰を通して神が差し出す天国の恵みを拒むとき、自ら地獄へ行く道を選ぶのだ。

D. 最後の聖句、すなわち30節にあるイエスの力強い宣言を見てみよう。

XIII. ヨハネ5:30。「わたしは、神の御心に従って、正しく裁く。」

A. ここでイエスが語っていることの多くは、すでに取り上げた内容だ。

1. イエスは再びご自身の裁きについて触れ、ご自身からは何もできないと再び語っている。また、御父の御心を求めることについても語っている。

B. 新しい情報は、その裁きについてだ。イエスは、ご自身が聞くことに基づいて裁く。そして、その裁きは義なるものであり、あなたの訳では「公正な」と読めるかもしれない。

1. イエスがここで主張しているのは、ご自身の裁きは公正であり、神の御心に基づいて行われるということだ。

2. 結局のところ、神の御心は成される。そして、イエスの裁きは公正なものとなる。

3. 罪は裁かれなければならない。

a. 私たちは皆、罪を犯し、神の栄光に及ばない者となった。（**ローマ3:23**）

4. そして、罪の報いは死である。

a. ローマ人への手紙6章23節には、罪の報酬は死であるが、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちであると記されている。（**ローマ6:23**）

5. 神の賜物、すなわち御子の十字架上の身代わりの死を受け入れる者は、永遠の命を受ける。神の賜物を拒む者は、罪の報いである死を受ける。

6. その裁きは公平であり、公正であり、正しいものである。イエスはカルバリの十字架上で私たちの罪の代価を支払われた。それゆえ、私たちが支払う必要はなくなったのだ。私たちの罪はすでに処理され、その罰はイエスによって完全に支払われた。カルバリの十字架において、正義は成し遂げられた。私たちの罪に対する神の怒りはイエスに注がれ、一方で恵みと憐れみは私たちに注がれた。すべては、私たちが恵みにより、信仰によって彼を信じたからである。なんと素晴らしい福音のメッセージを受け取ったことが。

7. アーメン？ アーメン。祈ろう。